

## 「海育」の取り組み :

### 「お魚カード」による海育と食育のコラボレーション

Taking the initiative in “Marine education (Let’s go to the sea, Umi-iku)”:  
Collaboration of marine education with food education using “Fish card”.

細谷 夏実<sup>1</sup>, 下坂 智恵<sup>2</sup>, 鈴木 信雄<sup>3</sup>, 浦田 慎<sup>4</sup>, 齋藤 雅代<sup>5</sup>, 北川 博幸<sup>6</sup>, 樋爪 友一<sup>7</sup>  
Natsumi Hosoya<sup>1</sup>, Chie Shimosaka<sup>2</sup>, Nobuo Suzuki<sup>3</sup>, Makoto Urata<sup>4</sup>, Masayo Saito<sup>5</sup>,  
Hiroyuki Kitagawa<sup>6</sup>, and Yuichi Hizume<sup>7</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学社会情報学部, <sup>2</sup>大妻女子大学短期大学部,  
<sup>3</sup>金沢大学環日本海域環境研究センター臨海実験施設, <sup>4</sup>一般社団法人能登里海教育研究所,  
<sup>5</sup>えんなか合同会社, <sup>6</sup>株式会社渚水産, <sup>7</sup>石川県鳳珠群穴水町産業振興課

キーワード : 海育, 食育, お魚カード

Key words : Marine education, Food education, Fish card

#### 1. 研究目的

日本は四方を海に囲まれており, 日本近海は多くの水産資源が得られる場所となっている。国土面積が狭いということもあわせ, 日本においては, これからも海を利用・活用することが必須である。そのために, 子どもの頃から海存在と意義を理解し, 海への興味や親しみを育み, 海と共生するという意識を高めていくことが必要であると言える。

このような背景を鑑み, 細谷は, 最近提案され始めた「海育(うみいく)」すなわち「ひとが自然の海とふれあい, 海と共に成長していく」という考え方に注目し, 子どもたちが海に親しむ機会を作ることを目指し, 様々な取り組みを行ってきた。

具体的には, これまでに能登内浦, 瀬戸内海牛窓などの磯について, 地域密着型のガイドブックの制作を行ってきた<sup>1) 2)</sup>。さらに 2016 年度には, 子どもたちが現場に持参して, 観察時に活用できるよう, 軽量で使いやすい「子ども目線」の磯の生きものガイドブックを制作した<sup>3) 4) 5)</sup>。完成したガイドブックは, 観音崎自然博物館が行う子ども向けの自然観察会などで利用されている。

一方, こうした活動を行う中で, 細谷は, 海や磯に出かけない(出かける機会がない)人に対しての海育も必要ではないかと考えてきた。そこで注目したのが, ガイドブック制作などの活動を通

じて知った能登の魚の直送便である。共同研究者である本学(細谷ゼミ)卒業生の齋藤も, 能登穴水町の渚水産の北川と「日本海直送便」を手がけている。この直送便は, 水揚げ量も旬も限られる能登の魚介類を「おまかせ」としてまとめ, 届けるものである。おまかせにすることで, 魚を無駄にせず発送できることから, 2016 年の石川県エコデザイン賞を受賞した。能登では, このような地元ならではの魚の直送便が他にも知られている。

今回は, この直送便に着目し, 能登の魚介類を通じて海に親しむ「海育」の機会として積極的に活用できないかと考えた。そこで, 今まで行ってきたガイドブック制作のノウハウを活かし, さらに「食育」の要素も盛り込んだ地域密着型の「お魚カード」の制作を提案した。

具体的には, 発送される魚が時期や状況により様々である点を活かし, 発送される魚について地域密着型の「お魚カード」を制作し, 海に出かけなくても食を通じて「海育」の機会を作る。能登の地域ならではの多様な魚介類を, 直送便を受け取る都市部の子どもたちやその家族に知ってもらい, 「食」を通じて「海」に親しんでもらおうということが狙いである。すなわち, 「食育」に「海育」を連携させていこうという取り組みである。

研究の進め方としては, まず, 能登で水揚げされ, 直送便として発送される魚の調査を行う。そ

の中でも、能登の特産と考えられるもの、能登独特の名前や調理法などがあるもの、などをカード掲載の魚としてリストアップする。調査は、本学学生がインターネットなどで事前調査を行った上で、実際に現地に赴き、現地の方たちや子どもたちに聞き取り調査をして絞り込む。

一方、お魚カード制作を、能登の子どもたちが地元の魚をよく知る機会（里海教育を通じた海育の機会）としても活用するため、共同研究者である能登のメンバー（鈴木・浦田・樋爪）と共に、地元の小学校に協力を依頼し、子どもたちが魚カードに記載する絵を描くという提案を行う。

お魚カードに記載する内容が揃ったら、学生がカードの編集・制作を行い、最終的には地元の魚の直送便に同封することを目指す。

本研究は、「海育」という新たな考え方や「食育」をコラボレーションさせることを目的とし、魚や食に対する興味から、海の自然環境に対する興味を育む、すなわち「食育」の取り組みを「海育」へと発展させる。「食育」というキーワードにより食の重要性が一般に広く認知されるようになったのと同じように、今後「海育」というキーワードが生活の中での「生きていくために大切な教育」の一つになっていくことが期待される。

さらに今回、海育に取り組んできた細谷と、能登の現地で海洋教育や地域おこしに尽力している産官学それぞれのメンバー（鈴木、浦田、齋藤、北川、樋爪）、さらに魚を中心とした調理科学の研究者（下坂）が協同で、「海育」と「食育」のコラボレーションを目指した取り組みを立ち上げることは、非常に斬新で有益なものであると言える。

## 2. 研究実施内容

研究目的の欄で述べたように、本研究では、「海育」に着目し、細谷が今まで培ってきたガイドブック制作の経験を活かし、お魚カードを介して「食育」と「海育」をコラボレーションさせることにより、海育のさらなる広がりを目指すこととした。実際の取り組み状況は以下の通りである。

### 2-1. お魚カードに掲載する魚の調査・選定

お魚カード制作に向けて、まず掲載する魚の選定に向けた準備を行った。

第1段階として、2017年度の前期授業期間に、ゼミの学生がインターネットなどで事前調査を行

い、齋藤の助言も得て、能登の特産と考えられる魚介類約20種類をリストアップし、特徴や調理法などを調べた。

次に、2017年8月4～6日に、学生と共に穴水町及びその周辺の地域を訪れ、魚や漁業などに関わる施設、お店を訪問し、そこで働く方たちから地元の魚介類に関する聞き取り調査を行った。

のとじま水族館やのと海洋ふれあいセンターでは、魚を中心とした海の生きものによる子どもたちへの教育という視点から、ボラ待ち櫓では伝統的な漁法の歴史や意義などについて、話を聞いた。また、食祭市場、渚水産、かあさんの学校食堂などでは、地元の魚がどのような名前や調理法で売られているのかという実態調査を行った。



図1. ボラ待ち櫓(左)とかあさんの学校食堂(右)

### 2-2. 地元小学生による魚の絵の制作

本研究では、お魚カード制作の目的として、都会の子どもたちへの海育だけでなく、能登の子どもたちが地元の魚をよく知る機会とすることも目指した。

そのため、お魚カードの取り組みの趣旨、地元の子どもたちに魚の絵を描いてもらうことによる海育の意義について、共同研究者である樋爪が、穴水町立穴水小学校、向洋小学校に提案し、2017年11月9～10日に細谷が穴水町に出向き、10日に樋爪、齋藤と共に小学校を訪れ、穴水小学校の大間校長、向洋小学校の野畑校長と面会・相談を行った。その結果、両校長から、絵の制作協力について快諾を得た。

同時に、小学校側から、2月10～11日に行われる穴水町の雪中ジャンボかきまつりの際、そこでふるまわれる魚介類にカードをつけて配布するのがいいのではないかという案が出た。そこで配布されれば、子どもたちも自分たちの絵が活用されているのを実感でき、喜ぶのではないかとのこと

であった。そこで、事前に調査・選定していた魚介類の中から、能登の冬の特産である香箱ガニ、カキ、サザエ、ナマコを選び、子どもたちに絵を描いてもらうこととした。

その後、穴水小学校では1～6年生の全校生徒が、向洋小学校では3～4年生が、1月末までに、それぞれ画用紙に魚介類の絵を描いた。

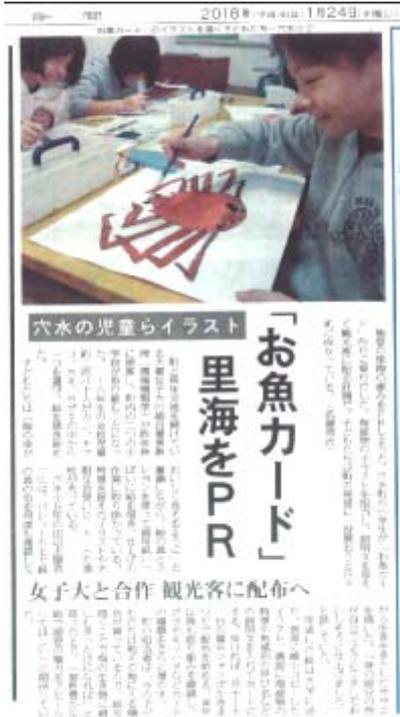


図2. 絵を描く子どもたちの様子  
(2018年1月24日・北陸中日新聞)

### 2-3. お魚カードの制作と配布

子どもたちが描いた画用紙の絵を、デジタルカメラで撮影して画像を取り込み、お魚カードの表面とした。裏面については、学生が表面に掲載されている魚介類の説明や料理のレシピなどを載せ、印刷した後にラミネート処理を行い、j6サイズのお魚カードを制作した。

今回は100枚分のお魚カードを制作し、細谷が2月10日に雪中ジャンボかきまつりに出かけ、地元の商工会の青年部が設営していたテント前で観光客に配布した。また、かきまつりに集まっていた地元の方たちから、意見や感想、今後への提案などの聞き取りを行った。



図3. 制作したお魚カードの例（右下は裏面）



図4. お魚カード配布に関する記事  
(2018年2月11日・北陸中日新聞)

### 3. まとめと今後の課題

本研究では、「海育」の普及を進める新たな取り組みの一つとして、お魚カードを制作し、子どもたちへの海育を行うことを目指した。

今回、穴水町の小学生が描いた魚介類の絵を表面とし、ゼミの学生が裏面に説明を加えたお魚カードを試作し、かきまつりで観光客に配布することができた。

カキ祭りの会場でカードを配布する際は、様々な図柄のうちから好きなものを選んでもらうという形で配布したが、どれにしようかと迷って選ぶ人、記念になるという感想をくれた人、2枚ほしい希望する人など、全体として喜んで持ち帰ってもらえたと感じている。

この取り組みは、地元では里海のPR活動として注目され、地元紙に2回にわたって掲載された(図2, 4)。かきまつりに参加していた地元の人たちからは、カードをつなげてのれんのようなものを作ってはどうか、子どもたちの描いた魚介の

絵を祭りの会場に掲示してはどうか、など、様々な意見や提案をもらうことができた。小学校からは、子どもたちの絵をカード以外でも活用してほしいとの要望もいただいた。

今後は、お魚カードの制作を引き続き行い、地元から発送される魚介類の産地直送便に同封し、海育を広げる一つの機会としたいと考えている。また、絵を受け取った人たちからアンケートの形でカードの感想を集め、海育の効果について検討を行いたい。さらに、子どもたちの描いた魚介類の絵をカード以外の方法で海育に活用できるように、新たな取り組みを考えていきたいと考えている。

#### 4. この助成による発表論文等

##### ①新聞記事

[1] 2018年 1月24日・北陸中日新聞朝刊・能登版

[2] 2018年 2月11日・北陸中日新聞朝刊・能登版

##### 参考文献

- 1) 「海の観察ガイド 瀬戸内海牛窓の海編」 筒井直昭・小林靖尚・坂本竜哉監修 岡山大学理学部附属臨海実験所/共同利用拠点 (UMI) (日本財団) (2014)
- 2) 「海の観察ガイド 能登内浦の海編」 鈴木信雄監修 一般社団法人能登里海教育研究所 (日本財団) (2016)
- 3) 「海の観察ガイド 江の島編」 赤坂甲治・細谷夏実監修 大妻女子大学社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻細谷研究室発行 (2017)
- 4) 「磯の生き物ガイドブック 観音崎編」 細谷夏実監修 大妻女子大学社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻細谷研究室発行 (2017)
- 5) 「フジツボガイドブック」 細谷夏実監修 大妻女子大学社会情報学部社会情報学科環境情報学専攻細谷研究室発行 (2017)